2019 vol.58

UR PRESS

UR都市機構の情報誌［ユーアールプレス］

特集 **団地だからできる！**

多様な世代が行き交う「まち」が
「食」の交流から生まれています

Special Interview

一緒に食べると仲良くなれる。料理を通して、人と人をつなぎたい

料理家
栗原心平さん

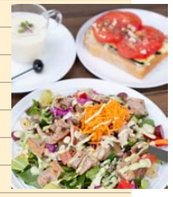
2019 Vol.58
UR
UR都市機構の情報誌［ユーアールプレス］
PRESS

CONTENTS

01 暮らしのカケラ❾ 「大勢で『いただきます』」 角田光代

03 Special Interview 未来を照らす㉑
栗原心平さん 料理家
一緒に食べると仲良くなれる。
料理を通して、人と人をつなぎたい

07 特集
団地だからできる！
多様な世代が行き交う「まち」が
「食」の交流から生まれています



09 浜甲子園団地（兵庫県西宮市）
多様な世代がゆるやかにつながる新しいまちを育てていく
13 南六郷二丁目団地（東京都大田区）
子どもの居場所を作りたい「ラーメンこども食堂」の挑戦
15 多摩平の森（東京都日野市）
大学生と高齢者が自然に出会う古くて新しい団地
19 ベルコリーヌ南大沢（東京都八王子市）
大学院生と共に、食を通してあたたかなつながりを
21 千葉県立保健医療大学×UR（千葉県千葉市）
地域の大学と連携 高齢者の健康寿命を延ばし孤立化を防ぐ

23 2030年、未来の住まいはこうなっている？
団地にＩｏＴ+ＡＩがやってきた！

25 URのまち あのまち・このまち・歩いてみよう！ その⑲
内田防災公園（愛知県犬山市）

27 復興の「今」を見に来て！⑯
台風被災からの復興の土台づくりをサポート 岩手県岩泉町
復興を支えた人への感謝の記念碑が建立 宮城県女川町

31 ベランダで楽しむ 四季の寄せ植え❾ 黒田健太郎
室内で楽しむ観葉植物の寄せ植え
32 防災グッズの新常識❾ 高荷智也
停電時や避難所で欠かせない熱中症対策
32 まるごと冷凍弁当のキホン❶ MAYA
容器ごと冷凍します！

33 プレゼント付きクロスワードパズル
34 UR INFORMATION

季刊「UR PRESS」Vol.58
2019年7月31日発行

発行 独立行政法人都市再生機構
〒231-8315
神奈川県横浜市中区本町6-50-1 横浜アイランドタワー
Tel 045･650･0882 Fax 045･650･0889

制作 新潮社、編集室りっか
デザイン 太田デザイン事務所
印刷 大日本印刷
※本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。
※本文中の肩書きは取材時のものです。

表紙の世界

近ごろ記事で目にする、
団地内のカフェや
定食屋さん。
お年寄りも子どもも一緒に
過ごせる場所があって、
関わりが生まれて、それぞれの
居場所になっていくとしたら、
とても素敵なことですね。

イラストレーション 小林マキ

大勢で「いただきます」

おかしな好みだと思うが、大勢で食べる昼ごはんが私はたいへん好きだ。理由は、おそらく私の仕事の基本単位がひとりだからだろう。仕事場にひとり。ひとりで昼ごはんを食べることをさみしいと思ったことはないし、むしろ、ひとりでさっとすませたほうがらくだ。だから、大勢で食べる昼ごはんが好き、というのは、現実に大勢でごはんを食べたい、という願望とは違う「好き」なのである。

高校を卒業するまでは、大勢の昼ごはんが日常だった。それについて好きも嫌いもなかった。

大学を卒業後、一年だけ一般企業でアルバイトをした。お昼になると、仲のいいアルバイト仲間でいっしょにお昼ごはんを食べた。会社の会議室や、ときには近所の食堂にいって。仲間といっても大勢ではなくて、五、六人だったけれど、それでもそれを「大勢の昼ごはん」と感じるくらいに、そういう機会が減りつつあることを実感していた。

アルバイトをやめて、もの書き生活に入ると、数人で昼ごはんを食べるという機会がぱたりとなくなる。仕事相手の人と食べることはある、友人と食べることはある、でも、何人もで同時に「いただきます」と箸をとるようなことは、まず、ない。そして現在へと到るわけだが、私はときおり、大勢の昼ごはん図をぼうっと思い描いているときがある。アルバイトしていた会社の殺風景な会議室とか、わざわざいくつかの机をくっつけていた中学生のときとか、林間学校の広い食堂とカレーのにおいとかを、ぼんやり思い描き、「ああ、いいなあ」と思う。「好きだなあ」と思う。

そんな私の日々でも、ごくまれに、数人で昼ごはんの機会が訪れることもある。取材の旅である。取材の旅は最少人数がたいてい三人（編集者とカメラマンと書き手）だが、そこに、現地コーディネーターとか、広告代理店の人とか、スポンサー的な人とか、海外だったら通訳などが加わって、大勢になることもある。ふだんだったら初対面の人とともに食事をするのは苦手だが、こういうときの昼ごはんは本当にたのしい。昔が戻ってきたような気がする。若返った気分ということではない。無自覚に享受していた何かとてもいいものを、もう一度味わいなおしている感覚だ。

取材の旅では当然同じメンバーで夜ごはんも食べ、酒も飲む。現実には私はその時間のほうがリラックスできるのだが、好きなのは断然昼ごはんで、記憶に残っているのも、夜ごはんではなくて昼ごはんだ。今は名前も思い出せない仕事相手も含め、大勢で食べた旅先の昼ごはんを思い出すと、同時にものがなしくもなる。そして、そうか、この場合の「好き」は、失ったものを思う気持ちの別名なのか、と気づく。

かくた・みつよ
作家。1967年、神奈川県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。1990年「幸福な遊戯」で海燕新人文学賞を受賞しデビュー。『対岸の彼女』（文藝春秋）での直木賞をはじめ著書・受賞多数。最新刊は『大好きな町に用がある』（スイッチ・パブリッシング）。

photo・T.Tetsuya

未来を照らす 21

Special Interview

Shimpei Kurihara

「一緒に食べると仲良くなれる。」

料理を通して、人と人をつなぎたい

栗原心平さん 料理家

料理家であり、会社の代表でもある栗原心平さん。多忙な日々のなかでも、料理すること、食べることを大切にし肩ひじ張らずに楽しんでいるのは、育ったご家庭の影響でしょうか。一緒においしいものを食べる時間を共有する喜び、食を通したコミュニケーションの魅力を語ってくれました。

料理好きな家族に育まれ料理家の道へ

料理に興味を持ち始めたのは、幼稚園の頃でしょうか。たぶん、一番最初に作ったのは、リンゴをすりおろしてガーゼで絞る、リンゴジュースですね。もうひとつはわらび餅。溶かして固めて、黒蜜ときなこをかけて。母に褒められて、お客さんにもよくお出ししていたと思います。

日曜日のブランチも僕の担当でした。朝のTVアニメが見たくて早起きするのですが、家族が起きてくるのを待っていたらおなかがすいてしまうので、僕が作っていたのです。ゆっくり起きてきた父が、庭で飲むアイスティーを淹れてくれるのも定番でした。

料理を仕事にし始めたきっかけは、僕が料理をする姿を見ていた母の仕事相手の編集者さんから「月刊誌で連載をしてみない?」と声をかけていただいたこと。23歳の頃です。正直、最初は「自分がやっていいんだろうか」と葛藤がありました。会社と二足のわらじで、時間的制約もありますし。でも、父は僕が将来この仕事に就くと思っていたようで、子どもの頃から僕の作る料理にはとても厳しかったです。褒めてもらえるようになったのは、最近、35歳過ぎてからです。

僕が幼稚園の頃から、母は家で料理教室をしたり、料理番組の裏方などで家を留守にすることが多かったのですが、必ず何かしら作り置きがありました。思い出の味は、麻婆春雨。朝に作っていくから、昼には汁を吸って、箸で持ち上げると全部持ち上がっちゃう(笑)。それをほぐしながらアツアツのご飯にのせて食べるのが大好きでした

阿部民子=構成、青木 登=撮影

ね。

父は、いわゆる男の料理を昔からよく作ります。3キロほどの肉を、野菜とハーブと塩に1週間漬け込んでから6時間煮た手作りコンビーフとか、メチャクチャおいしいんですよ。そして食事作法にはすごく厳しかったですね。迷い箸やねぶり箸など、何度注意されたかわかりません。あと、好き嫌いは許されなかったので、苦手なものは泣きながら飲みこんでいました。

子どもの頃は、そうしたしつけに対して「なんでこんなこと言われなきゃいけないのか」と思っていたんですが、いまは自分の子どもに同じことを言っています。家にいるときは僕が料理を作りますが、季節のおいしいものを知ってもらうためにも、旬のものをできるだけ食卓に出すようにしています。

イベントでも家庭でもそうですが、子どもに教えるときに気を付けているのは、迎合しないこと。きちんとできていないのに褒めたりしません。たとえば、餃子はちゃんと包まないと、焼いたときに肉汁が出ちゃっておいしくないとか。料理を好きになるには成功体験が大切なので、子ども扱いせずにきちんと教えることを心がけています。

くりはら・しんぺい

1978年生まれ。 料理家 栗原はるみの長男。一児の父。
(株)ゆとりの空間の代表取締役社長。
会社の経営に携わる一方、幼い頃から得意だった料理の腕を活かし、自身も料理家としてテレビや雑誌などを中心に活躍。仕事で訪れる全国各地のおいしい料理やお酒をヒントに、ごはんのおかずやおつまみにもなるレシピを提案している。
2012年8月より料理番組『男子ごはん』(テレビ東京系列)にレギュラー出演中。著書に、『栗原心平のこべんとう』(山と溪谷社)、『男子ごはんの本 その10』(KADOKAWA)、料理が初めての男性でも、お子さんと一緒に楽しんで挑戦できるレシピ本『栗原心平の とっておき「パパごはん」』(講談社)がある。
http://instagram.com/shimpei_kurihara

ひとりの楽しみ 大勢での楽しみ

料理をする楽しみって、いろいろあると思うです。たとえばひとりで作るときは、自分のことだけ考えて、自分の食べたいものを作れるのがいいですよね。趣味的な要素が強くなるといいますか。23歳のときに神戸に単身赴任したんですが、初めて自分のためだけに料理を作る環境になって、好きなものを作って食べていたら、あっという間に太りました(笑)。

家族で食べる楽しみには、喜んでもらうことが根底にありますよね。家族の好みを考えて献立に加えてあげると、相手は喜ぶし、自然と場がなごみます。

そして、親しき仲にも礼儀ありで、作ってもらう側は、感謝の気持ちを表現することが大切。うちの両親がそうしていて、父は必ず母にありがとうって言うんです。母は、いまもたぶん父のことだけを考えて料理を作っているし、そういう気持ちのやりとりって、すごくいいものだなと思います。

でも、なかには料理が苦手な方もいるでしょう。僕は、それには2種類あると思っています。ひとつは、料理が上手にならないから苦手という方。じつはその原因は、味見をしてないことが多いんです。ポイントになるのがお塩。食材が持つ塩分があるし、下味をつける料理だと、その分量がレシピに含まれていなかったりするんですね。だから、塩を入れる前に必ず味見して、どのくらい入れればいいか加減するといいですね。

塩の種類も盲点で、シェフや料理家の多くは食卓塩を使いません。僕も中粒の海水塩を使いますが、密度が違うので、食卓塩だったらレシピの3分の2の分量で十分です。そのあたりも気をつけるといいですね。

もうひとつのタイプは、料理が嫌いな方ですね。嫌いな方は、まずお味噌汁でも焼きりんごでも何でもいいので、自分が自信をもって作れる料理をひとつ持つといいですね。それがおいしければ、褒められますから。褒められることで料理が嫌いでなくなって、だんだん上手になっていくものなんです。僕も、きっと最初に親に褒められたのがよかったと思います。それが親の策略だったら恐ろしいですけど(笑)。

ごはんを一緒に食べると距離が一気に縮まる

仕事柄、地方に行くことも多いですが、その土地のさまざまな味を知ることで自分の世界がすごく広がりました。料理って、たぶん作る技術よりも、食べる経験値のほうが大事。そうした記憶の引き出しを増やすことで、ふとしたときにその味が蘇って、料理に生きてくることがあるんです。

地方ではその土地のものを食べて、土地の人と話すことで、より深く楽しめますよね。そういうふうに、食は人と仲良くなるため、コミュニケーションをとるためにとても大事なものだと思います。特に大人になると、なかなか人と仲良くなれる機会ってないですよね。でも、一緒にごはんを食べると、一気に距離が縮まります。

実家は大人数で集まるのが好きで、クリスマスなどは50人ほどのパーティーを開くのが恒例。そういう環境もあって、僕も人が集まることは大好きです。

自分の子どもが幼稚園のときには、パパ友が毎週のようにうちに集まってごはんを食べて、異業種の人たちと仲良くなりました。集まる場所の問題があるかもしれませんが、人が来ると家もきれいになるし(笑)、もっと気軽に集まる機会を増やせるといいですよね。自分で作るのが大変だったら、持ち寄りでもいいですし。一緒においしいものを食べて、時間を共有することが大切だと思うんです。

そういう集いでアドバイスするとしたら……みんなが参加できる共同作業が多ければ多いほどいいのではないでしょうか。餃子はおすすめですね。餃子のタネだけ用意しておいて、お客さんが来たらみんなで一緒に包む。それをホットプレートなどで、ワイワイ焼くのも楽しいですよ。

バーベキューもいいですね。僕はよくキャンプに行くんですが、事前にスモーク係とか前菜係とか肉係とか分担を決めておくことがあります。誰かが作るのを待っているんじゃなくて、料理を作る楽しさや時間を共有して、みんなが参加型で楽しむのがいいと思います。

これからはおいしいお酒の飲み方も提案していきたい。最近は、お酒を飲まない若い人が多いと聞きますが、お酒は絶対的にいいコミュニケーションツールだし、心を許す大きなきっかけにもなる。それにはおいしい料理も欠かせません。おいしい料理とおいしいお酒で心を開いて、コミュニケーションをとり、いろんな人と仲良くなれる。そんな場をつくっていきたいですね。

「UR PRESS」オンライン版で、パソコンやスマートフォンから栗原心平さんのインタビュー動画がご覧いただけます。
(2019年10月末まで)

WEB UR PRESS

団地だから できる！

特集

多様な世代が行き交う「まち」が「食」の交流から生まれています

子育て世代から高齢者まで、さまざまな年代の人々が住むまち。
URでは多様な世代がいきいきと暮らし続けられる、優しいまちづくりを進めています。
その中心となるのはURの団地。
今号では「食」にまつわる活動を中心に、各地の取り組みを紹介します。

建て替えを機に民間の戸建て住宅やマンションを誘致し、魅力あるまちに生まれ変わった浜甲子園団地。

青木 登=撮影

多様な世代がゆるやかにつながる新しいまちを育てていく

兵庫県西宮市 浜甲子園団地

関西を代表する大規模団地である浜甲子園。1962年に完成した建物を建て替え、民間企業や住んでいる人たちを巻き込んで、多様な世代がつながる魅力あるまちづくりを進めている。

上／「まちピカ大作戦」に集まった皆さん。毎月第2・4土曜の朝、エリアの中央を走る通り「ブールバール」周辺のゴミを拾う活動を続けている。
左／子どもたちも楽しくゴミ拾い。

新旧の交流を促す仕掛けをつくる

土曜日の朝9時。前日の雨が上がった浜甲子園団地広場に、子どもから大人まで20人近い人々が集まってきた。今日は月2回行われる地域の清掃活動「まちピカ大作戦」の日だ。ゴミ拾い用のトングとゴミ袋を手にすると、皆それぞれに歩き出し、子どもたちはたばこの吸い殻や弁当の空き箱などを器用につまみ上げ、お母さんやお友達とおしゃべりしながら楽しんでいる。

30分後、集まったゴミを分別して袋にまとめ、参加者にはこの広場にあるカフェ「OSAMPO（オサンポ）BASE（ベース）」の100円券が配られて、解散となった。

この清掃活動が行われている浜甲子園団地エリアは、西宮市の甲子園球場の近く。かつてここには浜甲子園団地の5階建ての住棟が並んでいた。浜甲子園団地は1962（昭和37）年に完成、約4500戸を有する大規模団地だ。

だが完成から35年近くたった平成12年度、部屋の広さや設備が時代にそぐわなくなり、団地の建て替え事業がスタート。建物の高層化を図りながら、余った敷地を民間に売却。そこに戸建て住宅やマンションを建設し、新たな住民を迎えて、多世代が暮らす魅力あるまちをつくろうという計画だ。

「団地に住んでいた人たちと、新しくやってきた人たちとのコミュニティーを形成し、暮らしやすいまちをつくる。そうしてこのエリアの価値向上につなげたいという思いから、エリアマネジメントの手法を取り入れ、一般社団法人『まちのね浜甲子園』を立ち上げました」

こう説明するのはURの松下順一。エリアマネジメントとは、住民や事業主などが主体的に地域の課題解決や魅力発信などを行っていく取り組みだ。

まちのね浜甲子園のスタートは2016年。新街区のマンションや戸建て住宅のデベロッパー7社と、そこにお住まいの人たちで構成され、近隣にある武庫川女子大学、もともとあった浜甲子園団地の自治会、それにURが連携・協力関係を結んでいる。

URの松下はエリマネの会議にも参加。URも積極的に関わっていきたいと話す。

開かれたリビングルームでゆるやかな交流が生まれる

まちのね浜甲子園が進める新しいコミュニティーづくりの仕掛けは、大きく3つある。冒頭で紹介した清掃活動のほか、新街区のマンション1階にある「HAMACO：LIVING」、それにカフェ「OSAMPO BASE」だ。

「HAMACO：LIVING」は誰でも気軽に立ち寄れる開かれたスペース。運営を担う事務局のオフィスもここにある。事務局長の奥河洋介さんが説明する。

「立ち上げた当初は、週に1回以上イベントやワークショップを行って、とにかく認知してもらうよう努めました。今では皆さんにこの存在が浸透して、お住まいの人が自主的に企画するイベントも増えました。毎日ふらりと立ち寄ってくれる人が20人以上いますし、小学生たちが放課後を過ごす場所にもなっています。子育て中のマ

浜甲子園団地にお住まいの松田悦一さんは79歳。「まちピカ大作戦」で子どもたちがゴミ拾いをしているのを見て、「健康のためにも、自分も何かやらないと」と自主的にこのエリアの草刈りをするようになった。すると、清掃活動に参加したパパたちが、松田さんが集めた草を袋にまとめて片付けていく。世代を超えたつながりが生まれている。

マンション1階にある「HAMACO：LIVING」。スペースデザインは武庫川女子大の学生たち。作品の展示・販売ができる「ちいさな物語BOX」や簡易キッチンもあり、多様な利用の仕方ができる。左下の写真は「HAMACO：LIVING」の奥にある、まちのね浜甲子園のオフィス。

武田ちよこ=文、青木 登=撮影

左／昨年10月にまちのね浜甲子園が主催して団地広場で開いた青空マーケット「まちのねピクニック」。
下／まちのね浜甲子園と武庫川女子大学が連携して開いた食育講座「健康ランチ交流会」。
写真提供／まちのね浜甲子園（2点共）

上／浜甲子園団地自治会で開かれた夏祭りの準備会議。奥河さんたちも参加。
右／広大な敷地にゆったりと建物を配し、快適な環境をつくっている。

団地自治会にもいい刺激が生まれた

浜甲子園団地は、もともと自治会活動が活発で、それは建て替えが進んでも変わらない。夏祭りは市長もあいさつに来られるほどで、秋の文化祭などのイベントをはじめ、数年前からひとり暮らしの高齢者への見守り活動なども行っている。とはいえ団地は高齢化が進み、子どもの数も減っている。まちのね浜甲子園との連携が始まり、うれしい変化があったとURの齋藤潤一は言う。

「夏祭りには団地の人だけでなく、新街区の人たちもやってきます。こちらは子育て世代が多いので、祭りに子どもの姿が増えたと、自治会の皆さんも喜んでいます。会場設営をまちのね浜甲子園の若いスタッフに手伝ってもらうなど、相互の交流が少しずつ進んでいます」

取材に伺った日には、自治会メンバーが今年の夏祭りの1回目の打ち合わせ会議を開き、まちのね浜甲子園から奥河さんたち2人が参加した。

「エリアマネジメントの手法を使って団地を再生し、新しいミクストコミュニティーをつくるこの試みは、関西で初。これがモデルケースになるよう、URとしても交流をさらに進めるために何ができるか考えていきたい」

子ども同士や家族連れが行き交い、高齢者らがのんびり散歩する通りを眺めながら、URの松下順一はそう言葉を結んだ。

「さまざまなイベントを通して、団地の人々と新街区の人たちの交流が進んでいる」と話すURの齋藤。

まちのね浜甲子園事務局長・奥河洋介さんと、「OSAMPO BASE」を担当する青山めぐみさん。「将来的には、この活動がここに住んでいる人たちだけで自走できるようになることが目標」と話す。

「OSAMPO BASE」は自家製パンとフレッシュな野菜を中心に、健康を意識した料理を提供。スタッフとお客さんとのコミュニケーションも円滑だ。

店は浜甲子園団地広場に面している。営業は金・土曜の8～14時。月に1、2回は住人たちの持ち寄りパーティにスペースを貸したり、ワイン会などのイベントも開いている。

自然と会話が生まれるみんなのカフェ

広場に面した場所にあるカフェ「OSAMPO BASE」は、オープン前に入念なリサーチを行った。まちのね浜甲子園事務局でカフェを担当する青山めぐみさんによると、

「店の前の道を朝、ウォーキングしているシニアの方々からは、朝開いている店があるとうれしい、という声をいただきました。また、健康に気を配っている人が多いこともわかりました」

その結果、開店は朝8時に。メニューは健康とシンプルをキーワードに、サラダとスープ、さまざまなトッピングをしたトーストが中心。パンは自家製。動物性の食材は使わず、健康志向のシニアにも受け入れられるものにした。

店内にはコミュニケーションが生まれる仕掛けが随所にある。店に入ると壁に沿って幅の広いベンチが置かれている。そこに座ると、カウンターにいるスタッフとお客さんたちが三角の線で結ばれ、相互に声がかけやすくなる。もちろんスタッフは積極的にお客さんに声をかけるが、注文のときや水を取りに来るときなどにも、自然に会話が生まれている。

「赤ちゃんから91歳のおじいさんまでご利用いただいています。その91歳のおじいさんは団地でひとり暮らしをしていましたが、『この場所があってよかった』とおっしゃってくださいました。ところが最近、近隣の高齢者住宅に転居したので、たまたま近くに行った折に訪ねたら、とっても喜んでくれて。それから息子さんに連れられて、また毎週この店に来てくださるようになりました。ここに来ることが、ひとつのモチベーションになったようで、とてもうれしいです」（青山さん）

「さまざまなイベントを通じて、団地の人々と新街区の人たちの交流が進んでいる」と話す。

「人とのつながりが、確実に生まれています」

清掃活動に参加していた男性も、ここで活動を知ったと言っていた。もちろんイベントには団地にお住まいの人も参加して、活動を通じていくつものコミュニティーが生まれている。

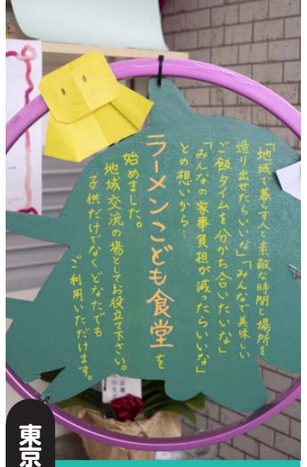
広場に面した場所にあるカフェから自然に広がっていくゆるやかなつながりが、確実に生まれています」

清掃活動に参加していた男性も、ここで活動を知ったと言っていた。もちろんイベントには団地にお住まいの人も参加して、活動を通じていくつものコミュニティーが生まれている。

マたちの情報交換の場でもありますね」

新街区の人たちには2週間に一度、イベントなどを告知するメールマガジンを配信し、団地を含むすべてのエリアの掲示板にも案内を掲出して、情報を発信している。

「今の時代、積極的にご近所付き合いをしたいと思って、このマンションに引っ越してくる人はまずいません。でもたまたまこのリビングで知り合い、そこ



東京都大田区

子どもの居場所を作りたい「ラーメンこども食堂」の挑戦

南六郷二丁目団地

子どもが一人でも安心して食事ができる場所を作りたい、地域交流の場になりたい。そんな思いを抱いて今年5月、南六郷二丁目団地に「ラーメンこども食堂」がやってきた。店の内外で、早くも世代を超えた交流が生まれている。

「ラーメンこども食堂」インスタグラム

上／「ラーメンこども食堂」の面々。皆さん近所にお住まいの元気いっぱいのお母さんチームだ。右から2人目が代表の武井恵美子さん。武井さんは夫の実家のラーメン店を手伝っていたのでラーメンの味は本格的。

左／大田区が管理する南六郷公園を囲むように3棟が並ぶ南六郷二丁目団地。敷地内には緑が多い。

お母さんパワーがあふれる店内

品川駅から約15分の京浜急行雑色（ぞうし）駅。南六郷二丁目団地は雑色駅から徒歩12分の多摩川沿いにある。周辺には小学校や中学校、保育園があり、団地内では普段から子どもの姿を多く見かけるが、今年5月、団地商店街に「ラーメンこども食堂」がオープンしてから、子どもの姿がますます増えたという。

「ラーメンこども食堂」は、普段は普通のラーメン店だが、月に1回イベントとして「こども食堂」を開催。子どもラーメンを1杯200円（大人用500円）で提供している。低価格だが味は本格派。世田谷の人気店「再来軒」の流れをくんでいるのだ。

しかし、店の一番の売りは店内の温かな雰囲気かもしれない。昔からの知り合いの家に来たような、気のおけない、なんともいえない安心感を感じさせてくれるのだ。

店を切り盛りするのは、子育て経験豊富なお母さんたち。PTAや地域ボランティア活動でつながった仲間だという。2年前から地域の町会会館で開催していたこど

牧岡幸代=文、菅野健児=撮影

上／醤油J麺。奥が子どもサイズ。すっきりとした味わいのスープが絶品。J麺とは、ほどよい弾力ののど越しのよいタイプの麺。小さな子どもでも食べやすいように製麺会社に特別に開発してもらったソフトラーメンも選べる。
左／やさしい味わいの豆乳ラーメンも人気。

下／シンプルで居心地のいい店内。厨房では大鍋でとんこつや鶏ガラがグツグツいっていた。

昼下がり、幼稚園帰りの3組の親子がやってきた。団地の近くにお住まいで、うわさを聞いて初めてやってきたという。「ラーメン大好き！」

「団地内の人と人をつなぐお手伝いをしていきたい」と語るURの和田真理子。

も食堂に手ごたえを感じ、よりしっかりとした拠点を持とうと物件を探して、団地商店街に入居したのだという。

URの和田真理子は言う。「共働き家庭が増えている団地でも、子どもの居場所づくりは大きな課題です。子どもが一人でも安心して食事ができる場所が団地内にできたことは、とても意味があると思っています」

子どもが安心して過ごせる場所、大人が日々のストレスを忘れて笑って過ごせる場所をつくりたいというお母さんたちの熱意と、URの思いが共鳴した。

世代間交流が生まれるみんなの居場所

こども食堂といっても客は子どもたちだけではない。高齢者を含めた幅広い世代の居住者、また、団地の外からウワサを聞きつけてやってくる人も多いという。和田も、こども食堂に世代間交流の場としての可能性を感じているという。

店内では、そんな和田の思いを軽々と超えるように多世代の交流がすでに自然発生しているようだ。

ラーメンを食べる子どもたちを笑顔で見守るお年寄り、そんなお年寄りとハイタッチを交わして帰る子どもたち。そこには安心できる日常がある。

「学校の宿題を持って来てここでやる子もいるし、突然の雨に〝タオル貸して！〟と飛び込んでくる子もいます。毎日楽しいですよ！」と、「ラーメンこども食堂」代表の武井恵美子さん。なかにはボランティアを買って出る小学生もいるという。

「自分たちも楽しみながら地域に貢献したいと考えている私たちの活動の場として、団地はとても向いていると日々実感しています。敷地にゆとりがあって、幅広い世代の人が暮らしている、子どもたちが車の心配なく気軽にやって来れる、店の前の公園で子どもたちが遊んでいる姿が視野に入る。団地、楽しいです。南六郷二丁目団地に来て本当によかったと思っています」と笑顔で語る武井さん。

一方でURの和田は、「こども食堂の活動をきっかけに、人の輪がますます広がるように、側面から応援していきたい。今後は団地内のイベントに参加していただくことも考えられますし、団地内にとどまらない交流も生まれそうです。人と人をつなぐ役割をURが担えると思います」と語る。

団地とこども食堂の出会いは、コミュニティーの可能性を大きく広げてくれそうだ。

上／団地型シェアハウス「りえんと多摩平」。写真は近隣の大学の学生寮として使われている244号棟と、建物前にある「あおぞらのテラス」。

左／この「りえんと多摩平」をはじめ「たまむすびテラス」のすべての住戸は人気が高く、なかなか空室が出ないという。

東京都日野市

多摩平の森

大学生と高齢者が自然に出会う古くて新しい団地

大正時代には宮内庁の御料林でもあった多摩平の森。その緑を大切に残しながら、建て替えを機に新しいまちづくりを進めた多摩平団地。大学生から子育て世代、高齢者が自然に出会い、ゆるやかにつながる魅力あるまちが生まれている。

古い団地の建物が魅力的に生まれ変わった

「たまむすびテラス」。なんともかわいい名前の付いた一角が、「多摩平の森」の中にある。

そこには4階建ての昔ながらの建物が5棟、ゆったりとした間隔で立っている。最寄りのJR豊田駅に近いほうから、団地型シェアハウス「りえんと多摩平」が2棟、菜園付き賃貸住宅「AURA（アウラ）243 多摩平の森」が1棟立ち、コロニーガーデンと貸し菜園「シェア畑多摩平 ひだまりファーム」が広がる。その先には「ゆいま～る食堂」が併設された高齢者向け住宅「ゆいま～る多摩平の森」が2棟。

住棟の間には長い年月をかけて成長した木々が枝葉を広げ、気持ちのよい木陰を生みだしている。ここが多様な世代の人々が行き交う、古くて新しい団地「たまむすびテラス」だ。

建て替えを機に複合的なまちをつくる

1958～60（昭和33～35）年に入居開始となった多摩平団地。JR豊田駅から徒歩圏内と近く、しかも緑豊かな土地であることから人気が高く、募集倍率が数百倍にもなるほどだったという。だが、建設から50年近く経ち、設備や間取りが古くなったのを機に、1996年、大規模な建て替えと新たなまちづくりの計画がスタートした。その経緯をURの山内広美はこう説明する。

「まず団地にお住まいの皆さまと地元の日野市、URの三者で、建て替えのテーマを話し合う勉強会を立ち上げました。この団地は自治会の活動が活発で、団地に愛着をお持ちの方が多いので、その勉強会で皆さまからの意見も伺い、合意形成をしながら建替事業を進めていきました」

その結果、それまで29haの敷地に247棟あった団地の建物を高層化して、11ha、30棟に集約。生み出された余剰地には、図書館や保育園などの公共施設をはじめ大型商業施設、民間業者の戸建てや集合住宅などを誘致。歩いて暮らせる、複合的で安全なまちづくりが進められた。これを機に、団地の名前も「多摩平の森」に改めた。

さらに団地再生の手法として、URが実験的に取り組んだのが「ルネッサンス計画2」と名付けられた既存住棟の活用だ。

民間事業者から5つの住棟の活用アイデアを募集し、コンペを経て3社のアイデアを採用。これが2011年から入居が始まった「たまむすびテラス」だ。

子育て世代から大学生高齢者までが一堂に

さっそく「たまむすびテラス」を見ていこう。

「りえんと多摩平」は3Kだった住戸を、3室+共用ミニキッチンで1ユニットに改装したシェアハウス。1階は共用スペースとし、キッチンやラウンジ、シャワールームなどを備えた。外にはイベントやパーティに利用できるウッドテラスもある。1棟は近隣にある大学が学生寮として利用、もう1棟も大学生をはじめ圧倒的に若い人が多い。

「AURA243 多摩平の森」の1階住戸には専用庭が付いていて人気が高く、募集倍率が数百倍にもなるほどだったという。だが、建設から50年近く経ち、設備や間取りが古くなったのを機に、1996年、大規模な建て替えと新たなまちづくりの計画がスタートした。その経緯をURの山内広美はこう説明する。

「まず団地にお住まいの皆さまと地元の日野市、URの三者で、建て替えのテーマを話し合う勉強会を立ち上げました。この団地は自治会の活動が活発で、団地に愛着をお持ちの方が多いので、その勉強会で皆さまからの意見も伺い、合意形成をしながら建替事業を進めていきました」

その結果、それまで29haの敷地に247棟あった団地の建物を高層化して、11ha、30棟に集約。生み出された余剰地には、図書館や保育園などの公共施設をはじめ大型商業施設、民間業者の戸建てや集合住宅などを誘致。歩いて暮らせる、複合的で安全なまちづくりが進められた。これを機に、団地の名前も「多摩平の森」に改めた。

さらに団地再生の手法として、URが実験的に取り組んだのが「ルネッサンス計画2」と名付けられた既存住棟の活用だ。

民間事業者から5つの住棟の活用アイデアを募集し、コンペを経て3社のアイデアを採用。これが2011年から入居が始まった「たまむすびテラス」だ。

住棟を高層化して集約して生まれたUR賃貸住宅「多摩平の森」。緑が豊富で、周辺をウォーキングする人も多い。

上／菜園の「AURA ハウス」のカレーパーティに集まった皆さん。「ひだまりファーム」では年に数回、このようなイベントを行っている。前列右端が宇賀神さん。

「ひだまりファーム」は45区画。2カ月に1回は季節の野菜づくりの講習会も開催。

右／外壁のブルーが目印の「AURA243」。菜園やコロニーガーデンを借りて、自然に親しむ暮らしができる。
下／「AURA243」の1階は前庭に玄関のある「ヤードハウス」。

「安心して暮らせる魅力的なまちが生まれています」と話すURの山内。

武田ちよこ=文、青木 登=撮影

昼間はイベントに使われる「ゆいま～る食堂」。奥には絵本から大人の本までそろった書架もある。

左／住棟の隣に増築された「ゆいま～る食堂」の建物。

右／高齢者住宅「ゆいま～る」の建物。入居者には日当たりの良さ、環境の良さが好評だという。

る。すぐ隣に貸し菜園「ひだまりファーム」があり、農機具用の作業小屋や休憩スペースがつくられ、とにかく緑があふれている。入居ターゲットは20代からシニア層までの2人暮らし。小さな子どものいる若い夫婦も多く、リビングルームを広くとった間取りが好評だ。

貸し菜園の利用者には、団地にお住まいの方だけでなく、近隣から通う人も多い。農園スタッフの宇賀神（うがじん）康夫さんによると、「利用者は20代後半から70代までで、特に子育て世代が多い」とのこと。取材で訪れたときは、菜園中央のテラスでカレーパーティーが開かれていた。もちろんカレーに入れるニンジンやジャガイモは畑で収穫したもの。

「環境の良さが、入居者の心の豊かさにつながる」と話す清水さん。

食堂に集まりゆるやかにつながる

カレーをほおばりながら、同じ趣味を持つ人たちの交流が生まれていた。

「ゆいま～る多摩平の森」は、㈱コミュニティネットが運営する高齢者住宅。併設する「ゆいま～る食堂」は365日、昼食と夕食を安価で提供する食堂だが、「ゆいま～る」に住む人だけでなく、誰でも利用できる。高齢者向けに食べやすく調理された料理は、小さなお子さん連れのママたちにも好評だ。

「ここは栄養バランスのとれた食事を提供する、地域に開放された食堂であると同時に、人々のコミュニケーションの場でもあるんです」

責任者の清水敦子さんが説明する。

木を基調にしたガラス張りの明るい店内では、ランチと夕食の合間の時間に、体操や絵手紙の教室、ハンドベルやコーラスの練習会といったイベントが、週に数回開かれている。

「『りえんと多摩平』の寮長さんが、ここで語学教室を開いたこともありますし、近隣の保育園の子どもたちがこちらの庭に遊びに来れば、高齢者がその様子を見守っていたり。うちにお住まいの方で、「ひだまりファーム」を借りて野菜づくりをしている方もいます。ここではごく自然に、さまざまな世代の人たちの無理のない交流が生まれています。また、住んでいる人が何かやりたいと思ったら、『たまむすびテラス』の3つの事業者間で相談して、お手伝いできる関係が生まれています」と清水さん。

「ゆいま～る」が一番にぎわうのは、12月のもちつき会。「りえんと」の大学生が積極的に手伝いに来てくれる。「去年はフランスからの留学生が、一生懸命にあんこを練ってくれました」と清水さんもうれしそうだ。

「たまむすび」の3事業者が共同で開催するさくらまつりや、団地自治会が主催する「夕涼み会」では、自治会と「たまむすびテラス」が相互に協力する。

さらに今年4月には「たまむすびテラス」の北側に新しい街区「多摩平の森て・と・てテラス」が完成した。「手と手を取り合って、多世代が行き交うまちに」との思いを込めて名づけられたこの街区には、日野市の社会教育センターや認可保育園、特別養護老人ホーム、リハビリ施設のある病院、スポーツクラブやデイサービス、カフェが集まる健康増進複合施設などを誘致。保育園児が病院を訪問したり、スポーツクラブが近隣の病院と連携するなど、相互の交流が図られつつある。

地域の人々が魅力あるまちの原動力

この事業に携わるURの山内広美は、「自分もこのまちに住みたい」と言う。

「建て替え計画のスタートから20年以上の年月をかけ、どういうまちをつくるかを、お住まいの皆さまをはじめ行政とURが一緒になって考えてきた、その歴史の重みを感じます。そうしてできあがったまちは魅力的で、自分も住みたいなと思います。このまちの魅力は、利便性だけではありません。ここに住む人々が、まちの魅力を高めています」

現在、この地域の小学校は児童数が増え、校舎の増築が計画されている。歴史ある団地に新しい命が吹き込まれ、森の木々が育つように、まちも豊かに枝を伸ばしている。

管理栄養士がカロリーと塩分を計算して献立を作成する定食。ランチは730円、夕食は780円。

「さくらまつり」には「たまむすびテラス」だけでなく、団地の人々も参加してみんなで楽しんでいる。「ゆいま～る食堂」のテラスで行うもちつき会には、大学生や子どもたちの姿も。

上／「て・と・てテラス」の「Tomorrow PLAZA」。この広場でお祭りも開催。

右／日野市とUR、事業者と地域の人々が連携しながら、多世代が生き生きと暮らし続けられるまちづくりを進めている。

団地の建て替えに際して、歴史ある多摩平の森を団地の財産として残した。

大学院生と共に、食を通してあたたかなつながりを

東京都八王子市 ベルコリーヌ南大沢

リノベーションしたキッチン付きの集会所をベースに、住民がゆるやかにつながる「ベルコリーヌ南大沢」。URと連携しながら中心となって活動しているのは、近隣の大学院生たちだ。

上／左から学生メンバーの西さん、鈴木さん、小島さん。ここで貴重な経験をしていると口をそろえる。現在学生の中心メンバーは5名だが、新たなメンバーを募集中。「リスクをおそれずチャレンジできるのは学生の特権。バックにはURさんもついてくれていますので」と西さん。
左／京王相模原線の南大沢駅と歩道デッキでつながるベルコリーヌ南大沢（中央が集会所）。駅周辺には大型ショッピングモールやシネコン、アウトレットモールもあり、人気のエリアだ。

くじけ、悩みながらもトライし続けて

「美しい丘」を意味するフランス語の名のとおり、緑豊かな多摩丘陵にヨーロピアン・テイストの美しいまちなみが広がる「ベルコリーヌ南大沢」。その3街区の集会所が「MUJI×UR団地リノベーションプロジェクト」で大型キッチンを備える空間に生まれ変わったのは昨年3月のこと。住民同士の交流を深める場にしてもらいたいと、URは利用開始に先駆けて近隣の首都大学東京の饗庭（あいば）伸教授の研究室と連携し、住民と共に活用法を考えていくプロジェクトをスタートした。活動の中心になっているのは、饗庭研究室でまちづくりや都市計画を学びながら、ルームシェアしてここで暮らす学生たちだ。

最初に行った住民へのアンケートで「ふらっと寄れるカフェがほしい」「誰かと一緒にごはんを食べたい」という声が多かったことから、まずは食事を一緒に作って食べる「ごはん会」からスタート。ところが、オープンイベントには多くの人が集まったものの、その後は思い通りに進まなかった。

「最初はチラシを作って配っても、全然人が集まらなくて、みんなで悩みました」と、学生メンバーの西 昭太朗さんは振り返る。仲間の鈴木萌佳さんも「何度もくじけそうになりました」と。何が問題なのかを考え続け、全世代向けのイベントだけでなく、ターゲットをしぼったイベントも企画。平日の昼間に子育てママ向けの水遊びイベント、夕方には仕事帰りの人も参加できるビアガーデン、大人の女性向けの本場の中華料理を学ぶ「辛・麻婆豆腐」イベントなどを開催することで、「こういう会を望んでいた」と参加者が徐々に集まるようになった。

節分や夏祭り等、集会所でさまざまなイベントを開催し、住民の交流を図っている。

食を通して生まれるあたたかな関係

活動から1年を経て、メンバーが気づいたのは、「お互いが楽しくなければ続かない」ということ。そして「コミュニティーをつくる、というより、もともとあるコミュニティーをベースに、そこからつながりを広げていくほうが自然だと気づきました」と西さん。メンバーの小島（おじま）みのりさんも「料理が得意な方がいても、〝ここで作ってくれませんか？〟といきなりお願いすると〝いや、いいです〟と断られてしまって。まずはイベントに参加してもらって関係を築いてからお願いすることが大事」と気づきを共有する。

「息苦しくならないように、無理なく楽しく続けられるようにと心がけています」と話すURの清水。

これまで経験したことのない企画の立て方、依頼の仕方や参加者への気配りなどを学び、トライ&エラーを繰り返しながら交流を広げ、人々をつなぐ学生たち。その一生懸命さで、まわりの人たちを自然に巻き込みつつある。URの清水成俊（しげとし）は先日、住民の方が学生たちに「これ食べて」とおかずを差し入れる様子を見て「お住まいの方同士のあたたかい関係が、食を通じて生まれている、そんな理想的な光景がみられて、うれしかったです」と笑みをもらす。また、首都大学東京の前身である都立大学出身でプロジェクトを担当するURの渋谷雅史（まさし）は「忙しい中、熱心に活動する現役の学生たちは大変頼もしく、教えられることも多い」と話す。

業務用の火力の強いオーブンや冷蔵庫、ダブルシンクまで備えられた集会所が大活躍。

後輩でもある若者たちと共に活動し、サポートしているURの渋谷。

学生たちの今年度のテーマは「弱いつながりを増やそう」。無理に会話しなくてもいい、将棋や囲碁、読書をするなど自由に過ごしてもらっていいので、集会所に足を運んでもらう機会を増やしたい。そんな思いで、読み終えた本を持ち寄り合う企画「ベルコ本棚」や、ワンコインで飲めて食事もできる「居酒屋べるこ」を毎月開催。乳幼児から80代まで幅広い世代が集まる会に発展している。

昨年、住民による自主防災会が立ち上がり、集会所で「ひまわりカフェ」も開かれるようになった。「ほんわかとしたあたたかい関係」「近くに誰かの存在を感じられる空間」がベルコリーヌ南大沢に新たに生まれ、あたりをやさしく包み込み始めている。

妹尾和子=文、青木 登=撮影

花見川団地で行われた「口腔機能改善プログラム」で、学生たちがご挨拶。

千葉県千葉市

地域の大学と連携 高齢者の健康寿命を延ばし孤立化を防ぐ

千葉県立保健医療大学×UR

URは千葉県立保健医療大学と連携し、千葉市内の6つの団地で、高齢者の健康寿命を延ばし、孤立化を防ぐためのプログラムを実施。団地の皆さんから好評だ。

団地の高齢者を健康にするプログラム

千葉市美浜区にある千葉県立保健医療大学（以下、「ほい大」）は、看護学科、栄養学科、歯科衛生学科、それにリハビリテーション学科からなる公立大学。URは2017（平成29）年度に、このほい大と連携協定を結び、千葉市内でURが地域医療福祉拠点化を進める6つの団地で、健康増進の取り組みを実施している。

その目的をURの伊藤公晴（こうせい）が説明する。

「団地にお住まいの高齢者がいつまでも健康でいられるよう、健康寿命を延ばすお手伝いをすると同時に、健康に関するイベントに参加していただくことで、高齢者の孤立化を防ぐのもねらいです。大学にとっては、研究フィールドの確保、社会貢献だけでなく、学生たちのアクティブラーニング、サービスラーニングにもなるということで、連携が進みました」

17年度には、花見川団地、千草台団地、あやめ台団地、高洲第一・第二団地で「ほい大健康プログラム」を実施。これは全学科が参加して、医師による健康チェック・相談コーナー、栄養学科による食事と栄養のアドバイス、歯科衛生学科による口腔機能向上の舌体操、元気に歩くためのアドバイスなど盛りだくさんのプログラムとなった。もちろん学生たちも参加。団地の皆さんからは「病院でしか聞けないことが、気軽に医師に相談できる」と大変好評だった。

健康づくり推進の取り組みを持続させたいと話す、千葉県立保健医療大学健康科学部歯科衛生学科の麻賀教授（左）とURの伊藤。

あやめ台団地で行われた「ほい大健康プログラム」。歩幅や歩く速さを測り、歩き方のアドバイスを行った。

「口腔機能改善プログラム」は全9回。初回に口腔機能を測定し、2〜8回は健康教室と口を使ったゲームを実施。最終回に再度機能を測定した。参加者は大学生とのふれあいも楽しみにしていた。

プログラム開始前の体調チェック。

課題は持続可能性 地域との連携も

18年には、これに加え、口腔機能改善プログラムも開始。これは10月から今年6月まで9回にわたるプログラムだ。

担当するのは、歯科衛生学科の麻賀多美代教授。健康長寿の実現には口腔のケアが大切なので、加齢とともに衰える口腔機能を改善することが目的だ。

このプログラムは花見川団地で行われ、70代の方々を中心に毎回25〜26人が参加。皆さんとても楽しみにされていたという。

「参加する方々が、大学生たちを孫のようにかわいがってくださるんですよ。『若い人たちと会えてうれしい』『別の住棟の人と知り合いになれた』と、皆さんこの集まりをとても楽しみにされていて、プログラム終了時には、寂しいと言っていただきました」

ふだん高齢者と接する機会の少ない大学生たちにとっても、貴重な機会となった。サークルで副リーダーを務める鈴木結衣さんは、「とっても楽しかった」と話す。

「私の名前を覚えてくれて、声を掛けてくださったり。私からも『○○さん、体の調子はどうですか』と声を掛けられるようになり、皆さんとのつながりが深くなるのを実感しました」

「学生たちが仕事に就いたときに、この経験はきっとプラスになると思います」と麻賀先生も学生たちの活躍を見守っている。

この口腔機能改善プログラムは、さつきが丘団地でも実施している。さらにこの秋にも、URが地域医療福祉拠点化を進めている千葉市内の複数の団地で、『ほい大健康プログラム』を開催しようと、大学側と協議を進めている。

大学とUR、それに団地に住む参加者、すべてが満足しているこの取り組みだが、課題は持続可能性。URの伊藤は「団地の皆さんにとても喜ばれているので、ぜひ続けていきたいと思っています。そのためにほい大とURが協力して、過度な負担がかかることなく、継続していける手法を工夫したい」と話す。

麻賀先生も、「今回のプログラムに参加してくださった方たちを、今後どうつないでいけるか。大学だけでなく、例えば地域の歯科衛生士さんたちと連携するようなことも、ひとつの可能性かもしれません」と期待を寄せる。

URと大学の連携が地域に広がり、健康長寿の輪がさらに広がることに期待したい。

口腔機能改善プログラムのサークル副リーダーの鈴木さん。「参加者に喜ばれ、頑張ったかいがありました」

「ほい大健康プログラム」で栄養学科による食事や栄養アドバイス（上）や、医師による健康チェック・健康相談（下）を実施した。

赤羽台に出現した未来の住まい
「Open Smart UR」

2030年、未来の住まいはこうなっている？

団地にＩｏＴ＋ＡＩがやってきた！

INIAD東洋大学とともに
未来の住まいの研究を
進めているUR。
このたび2030年の住まい
「Open Smart UR」
モデル住戸が完成しました。

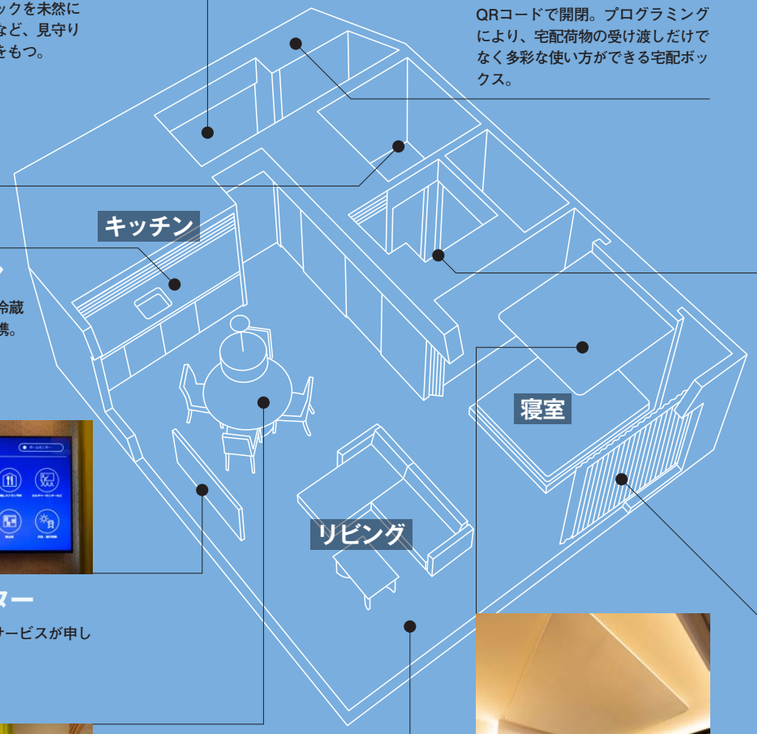
URの担当者、前列左から渡邊美樹、村上修一。後列左から伊井裕子、大泉達也。「いろいろなサービスとの連携を強化したい」「団地に住む概念が変わる！」と、ここから広がる未来に思いを馳せる。

インフォメーションミラー

交通情報など最新のインフォメーションを見ることができるモニター。

電動カーテン・ブラインド

状況を認識して自動で開閉。



エントランス

室内との段差がない玄関。

スマート宅配ボックス

QRコードで開閉。プログラミングにより、宅配荷物の受け渡しだけでなく多彩な使い方ができる宅配ボックス。

浴室

センサーでヒートショックを未然に防ぐなど、見守り機能をもつ。

スマートキッチン

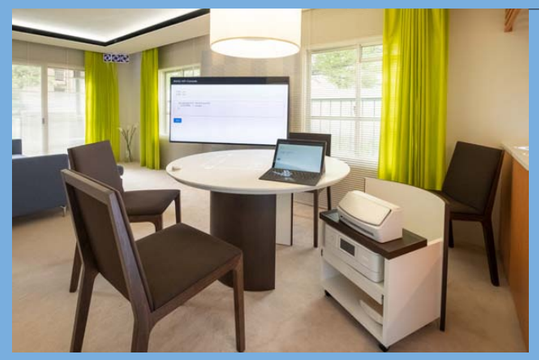
フードデリバリーサービスと冷蔵庫や調理器具などの家電が連携。

ホームモニター

住む人に必要な各種サービスが申し込めるモニター。

放射冷暖房パネル

放射熱を使った冷暖房は、風の吹き出しがなく快適。センサーで常に最適な室温を維持。



多機能テーブル

PCなどが収納されたテーブルの引き出しを開けると、照明やモニターの向きが変わり、オフィス空間に切り替わる。

各所に設置されたセンサー群

各種画像センサーからのデータで、「人が倒れた」などの異常事態をAIが判定、トラブルを早期発見。

魅力的なまち、安全な暮らしを実現する未来の住まい

6月、東京都北区にある赤羽台団地。高層住棟への建て替えが進むなか、1962（昭和37）年に建設された当時のままの姿を残すスターハウス棟の一室に、大勢のメディア関係者が集まった。この日、URと東洋大学情報連携学部（INIAD）が共同で研究を進めてきた未来の住まい「Open SmartUR」のスタートアップモデル住戸がお披露目されたのだ。

URとINIADは2018（平成30）年1月に覚書を締結し、「URにおけるIoT及びAI等活用研究会」をスタートさせた。会長は日本を代表するコンピューター科学者でINIAD学部長の坂村 健教授。

坂村 健教授

日本では20年に小学校でプログラミングの授業が必修化される。その子どもたちが大人になる2030年、日本は人口の3分の1が65歳以上の高齢者になると予測されている。情報技術の進歩でIoTが進み、すべてのモノがネットワークでつながる社会になっているだろう。働き方も大きく変化し、在宅勤務やサテライト勤務がごく当たり前になる。そんな時代の団地はどうあるべきなのか。

その答えとして今回提示されたキーワードのひとつが「HaaS（Housing as a Service）」。

これはIoTやAIなどの情報技術を活用し、ITプラットフォーム上のさまざまサービスを使って、団地に「ハウジング」という新たな生活環境を提供するというもの。例えばホテルでは、ルームサービスで食事が届き、コンシェルジュにチケットの手配を頼むなど、宿泊客は自分の部屋にいながらさまざまなサービスを受けることができる。それと同じようなサービスを団地で受けることができるようになるイメージだ。

「これまでのURは団地の建物をつくり、ハード面の修繕を行ってきましたが、これからはそこにIoTやAIなどの技術を使って、サービスを提供するという考え方が必要です。そのためにはサービス関連のさまざまな企業や事業者とのネットワークも広げていく必要があると思っています」

研究会の立ち上げメンバーであるURの渡邊美樹は言う。

もちろんこのスタートアップモデル住戸はいま考えられる機能、サービスを詰め込んでつくったもの。完成形ではなく、ここを発信拠点として、ここから新しい住まいを考えるための場だ。

2030年は、そう遠い未来の話ではない。URは現在の団地が抱える課題を解決し、その可能性を広げるために、未来の住まいを研究し続けていく。

※IoT：Internet of Thingsの略。さまざまな物がインターネットにつながる。

武田ちよこ=文、青木 登=撮影

URのまち

あのまち このまち 歩いてみよう！その19

愛知県犬山市 内田防災公園

URが手がけた土地のまわりには、素敵なまちが広がっています。地図を手に歩いてみませんか？

	開発前	開園
内田防災公園	民間の運動場	2018年3月

0m　200m

木曽川

※7月中旬～補強改修工事実施 詳細は犬山市観光協会HP等で確認

国宝 犬山城

現存する日本最古の様式の木造天守

1537年に織田信長の叔父・信康が築城

落雷で全壊し2018年に新調

唐破風

廻縁（まわりえん）
木曽川や濃尾平野などを一望 360°のパノラマビュー！

地下（石垣部分）2階、地上4階の6階建て

天守内の階段は衝撃の急角度!!

石落とし

付櫓

城内の石垣は自然石をそのまま積んだ"野面積"

三英傑が奪い合い！

木曽川は当時の交易の要衝 ぜひ押さえたかった！

信長　秀吉　家康

実際に入城！

犬山に来てね！

犬山市公式キャラクター わん丸君

犬山城下町

約400年前の町割りと建物が現在も残る、風情豊かな城下町

総構え

概略図

城と城下町が一体となって守りを固めた「総構え」形式

堀や土塁　町人町　侍町　木戸　寺が密集

見つけてみよう！

城下町には登録有形文化財がたくさん！

三光稲荷神社

かわいい縁結び絵馬が女性に大人気

針綱神社

濃尾の総鎮守 犬山祭はここの祭礼

川ぞいからもナイスビュー！

観覧船

昼の鵜飼もあります！

1300年続く伝統漁法の鵜飼をすぐ近くで観覧！

木曽川うかい（6/1～10/15開催）

鵜舟

犬山温泉

H8年に掘削された温泉

木曽川遊歩道

日本庭園・有楽苑

国宝の茶室 如庵（じょあん）がある（2021年秋まで公開一次休止）

犬山城第2駐車場

2018年3月オープン！ 内田防災公園

犬山城下町 待望の防災拠点！ 観光駐車場も整備

休みの日には芝生広場で遊ぶ家族連れの姿も

犬山遊園駅

城見歩道

退職後「地元に貢献したい！」と、ボランティアガイドを始めました。現在58名で勉強・交流も深めつつ、ガイドしています

歴史観光ボランティアガイド ナイスで犬山 代表 小島成夫さん

「ナイスで犬山」「Nice day 犬山」

犬山ですてきな一日を！

毎年4月第1土曜・日曜に開催！

ユネスコ無形文化遺産 犬山祭

1635年に始まり、今年385回目をむかえた犬山祭。城下町の13の町内がそれぞれの「車山（やま）」で針綱神社に向かい、「人形からくり」を奉納する。

犬山祭のことなら「どんでん館」へ！

どんでん館代表 尾関冨雄さん

巨大！これが車山だ！

高さ約8m！ 重さ3～5t！ 3層構造！

上山（うわやま） からくり舞台

中山（なかやま） からくり人形の繰り方

下山（したやま） 若い衆と子どものお囃子方

かじ棒

この中で「てこ衆」が押して動かす

金襴袴

お囃子方の子ども

てこ（曳き手）

本町車山蔵

車山蔵（くるま） 各町内にある車山の格納庫

見どころ1 13の車山が勢ぞろい！

各車山蔵を出発した全13の車山が犬山城前広場に集結！

見どころ2 幻想的な夜車山

夜はろうそくのちょうちんで飾られる、その数365個！

見どころ3 大迫力の「どんでん！」

てこ衆が人力で車山を持ち上げて180°方向転換！

オリャーッ!!

見どころ4 人形からくり

各車山ごと全13演目の人形からくりが見事！

二足歩行ロボットの原点とも言われる「乱杭渡り」

犬山名物！串グルメ

1 でんがくの松野屋
明治創業！
豆腐でんがく

2 桜屋菓舗
舞のかざし
漉し餡、羊かん、寒天で上品♥

3 蕎俵屋犬山井上邸
守口漬の老舗
醤油おこげ串
焼おにぎり、守口漬、奈良漬のハーモニー

4 山田五平餅店
五平餅（団子型）
ゴマ・くるみ・ピーナッツ入りのタレが香ばしい！

犬山城前広場発！

1 犬山お笑い人力車

車夫が若手芸人！

※実施時期は要確認（犬山市観光協会HP）

城下町4店で着物がレンタルできる♥

お城もなか

1840年の犬山祭の一日を再現した巨大ジオラマが圧巻！

城とまちミュージアム

別館 からくり展示館

1866年創業！銘菓がそろう

御菓子司 松栄本店

犬山特産品館

大手門跡

ここが犬山城の「正門」だった

本町通り

メインストリート

食彩茶房 豆腐かふえ 浦嶌

オーナーの実家が老舗豆腐店！

創業1597年！

家康も好んだ蔡酒

小島醸造

スイカズラの花を使ったリキュール

慈冬酒（じとうしゅ）

珈琲ボタン

看板猫に会えるカフェ

ポン　ポポ

旧磯部家住宅

江戸時代の呉服商の建物

どんでん館

音と光の演出や資料で犬山祭を体感！

犬山祭の車山4輌を保管・展示

電柱を地中化！

メインストリートの本町通りは昔ながらのまち並みが続く

蔡師口木戸跡

総構え跡

オシャレ&財力を表現

起り屋根（くり）

←間口6.8m→ 奥行は58m！

当時は間口の広さで課税されたため、どこも狭くしていた

余坂口木戸跡

城下町の出入口は木戸とクランクで防衛していた

1842年築の古民家レストラン

フレンチ奥村邸

元新聞記者！

40代半ばでUターン。観光活性化につなげたい、と2004年に五平餅店をスタート。

まだまだ犬山を盛り上げます！

山田五平餅店 オーナー 山田 紘一さん

犬山駅

名鉄犬山線

←名鉄名古屋

きな粉や黒糖などを使った飴

犬山のソウルスィーツ♥

げんこつ飴

約400年続く伝統の味を今に伝える老舗の2店

厳骨庵（げんこつあん） 固め 創業170余年！

藤澤製菓 ちょっと固め 創業140余年！

※UR都市機構が手がけた地区を中心にマップを作成しています。掲載した情報は2019年6月現在のものです。

山本郁子＝イラスト

急激な雨量の増加と水位の急上昇によって、堤防を越えた岩泉町の小本（おもと）川。河道の掘削や築堤、護岸、橋梁の架け替えなど、復旧・復興作業が続く。

復興の「今」を見に来て！
第16回 Part1
岩泉町
岩手県

台風被災からの復興の土台づくりをサポート

2 被害は水の豊かな町の全域に

2011（平成23）年の東日本大震災で被災した岩泉町。この町をさらに台風10号が襲ったのは、2016（平成28）年8月30日のことだった。豪雨による河川の氾濫や土砂災害で多くの人命が失われるとともに、河川や道路などのインフラをはじめ、家屋や施設にも甚大な被害が及んだ。

緑深い森と豊かな泉に抱かれた岩泉町は、本州最大の広さをもつ町だ。その全域にわたる被害を前に、いったいどこから手をつけていいのか？　町の人々は途方に暮れたという。自然災害では、いかに初動を早くするかがポイント。町のマンパワーが限られるなか、岩泉町からの支援要請を受けたURは、復興まちづくり計画策定のための助言や技術提供などを担当。復旧のための工事発注者支援をするグループ会社のURリンケージと共に、町の早期復旧・復興に向けて尽力してきた。

被災した年の11月にURから岩泉町に派遣され、昨年4月より副町長を務める末村祐子は、日が経

被災当時の流木が押し寄せた岩泉上町地区（上）と、道路が崩れた県道久慈岩泉線（下）。

災害公営住宅は63戸。URは復興まちづくりを事業情報の提供や、考え方への助言などで支援。建物の建設は岩泉町で行った。

被害の全体像を把握するのが大変だったという末村祐子副町長。

っても次々とあちこちで被害が明らかになる状況に驚いたという。

「毛細血管のように町土全体に張り巡らされた川や沢、その随所で被害が起きたのです」

経験を生かして町に寄り添う

復興まちづくりを進めるうえで大変役に立っているといわれるのが、URが作成した「災害復旧ロードマップ」だ。

「町内の6つの地域ごとに、地図上に災害箇所と工事の予定などを書き込んだもので、いつ、どこで、どのような復旧工事が行われるのかを目に見えるかたちにしたものです」

と末村副町長は説明する。このマップにより、町の人たちに復旧工事の進捗をわかりやすく伝えられるようになったと喜ばれた。また今後の備えの意味でも、災害箇所の貴重な記録となっている。

何が大切なのか、どんな選択肢がありえるのか、特に国の事業の情報提供などで、町の職員を支えることを心がけたURの職員たち。

「こうした対話は、復旧・復興を通じ、より災害に強い地域をつくろうとする職員の情熱を後押しし、町民に安心いただけるまちづくりの基礎になったと思っています」

と末村副町長。復興まちづくりを主導してきた中居健一町長も「豪雨災害に関する膨大な復旧工事や復興まちづくりを短期間で集中的に進める上で、震災復興など経験豊富なURグループの協力が得られ、安心感がありました」

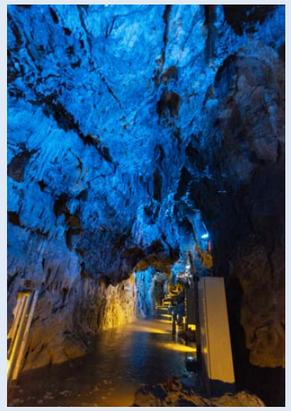
と話す。

建物被害は1916棟。河川が133カ所被災するなど、町の復旧・復興に要する経費が東日本大震災の10倍以上に及ぶ甚大な被害。

町の基幹である農林水産業、それを6次産業化で支える岩泉ヨーグルトをはじめとする乳製品、日本三大鍾乳洞のひとつ、龍泉洞の水を使った珈琲や化粧水、日本一の生産量を誇る山わさびの生産など、町では産業経済の再生にもいち早く着手。販路が途切れることのないように、施設の迅速な復旧のための対応に努めた。

このような取り組みの結果、一部を除き、被災からほぼ一年で工事発注の目途が立ち、現在も順次、復旧・復興工事が進められ、活気が戻ってきている。

さらに岩泉町では、災害時、こきざみに変化していく状況や情報を集約し、正しくタイムリーに把握、発信すべく、昨年度、危機管理課を設置。各地の自主防災組織と連携がとれる体制を整備している。昨年は町民を含め防災士の資格を約60名が取得するなど防災意識も高まっている。いつ、どこで、何が起こるかわからない今の時代、備えにも力を入れ、まちの再生に向かって進む岩泉町だ。



龍泉洞は観光名所でもある鍾乳洞。世界有数の透明度を誇る地底湖や鍾乳石が造り出す神秘的な岩肌に圧倒される。

妹尾和子=文、菅野健児=撮影

後世に伝えていくための碑です

女川駅ロータリーに建てられた震災復興事業記念碑。碑に刻まれた言葉は、須田町長によるもの。裏面には、復興事業の経過や事業に携わった企業名などが記されている。

復興の「今」を見に来て！ 第16回 Part2

女川町

宮城県

復興を支えた人への感謝の記念碑が建立

女川の玄関口、JR石巻線女川駅。温浴施設「女川温泉　ゆぽっぽ」が入り、駅前広場の足湯も観光客に大人気。

平日午後2時過ぎのJR石巻線の終点、女川駅。2両編成の列車が駅に滑り込むと、リュックサックを背負った学生や買い物帰りの女性などが次々とホームに降り立つ。ウミネコをイメージした駅舎の先に見えるのは、真っ青な女川湾。駅前広場では、観光客のグループが足湯につかりながら楽しげに会話を交わす――取材で訪ねた女川には、ゆったりとした時間が流れていた。

東日本大震災から8年余り。大きな被害を受けた宮城県女川町は、一番高いところで約18mも盛土をして、新たなまちに蘇った。今年3月には、中心市街地222ヘクタール、離半島部14地区55ヘクタール余りの基盤工事が概成。それを祝い、工事に携わった延べ150万人への感謝の言葉が刻まれた震災復興事業記念碑が女川駅ロータリーに建立された。

震災以来、復興の陣頭指揮を執ってきた須田善明町長が語る。

「この方向で必ず道が拓ける、と確信できたのは、2015年3月に完成した女川駅と駅前広場の現地に自分の足で立った時でした。ここまで来ることができたのは、住民の皆さんの協力、そしてURとJV（建設を請け負う共同企業体）、町が三者一体であったからこそ。この記念碑の文章は、日々造成現場で力を尽くしてくれた皆さんへの感謝と共に、そのような人々の存在があって初めて私たちが暮らす新たな大地が築き上げられたんだ、ということを後世へ伝えるものなのです」

「思い描いていた以上のまちになった。復興の本当のスタートはこれから」と語る、須田善明女川町長。

上／復興が進む女川の町。高台住宅地からも海が見える眺望点を設けるなど、海の存在を最大限に生かすまちづくりが進められている。

左／昨年10月に開庁した女川町新庁舎。役場庁舎のほか、生涯学習センター、保健センター及び子育て支援センターを集約した複合施設になっている。

上／女川駅から海へとまっすぐに続く「レンガみちプロムナード」。道の両側には、港町女川ならではの海鮮自慢の飲食店などが並び、週末には観光客でにぎわう。
右／2015年3月、女川駅完成にあわせて開催された「まちびらき」イベントと「復幸祭」。復興まちづくりの節目となった日だ。

自分の経験を引き継ぐのも使命！

「女川は人が優しいし、海が近くて気候も過ごしやすい。いいまちです」とURの渡邉征爾。

現場で培った経験を災害復興に活かす

女川町の復興に向けて、女川町とURは2012年に復興まちづくり推進パートナーシップ協定を締結。URは事業計画の作成から区画整理、災害公営住宅の整備など、包括的・総合的にまちづくりをサポートしてきた。安全なまちをつくるために山を切り崩し、盛土に使った土の量は、10トンダンプトラック140万台分に及ぶ。UR女川復興支援事務所副所長の渡邉征爾は、赴任して4年目。ニュータウン建設で大量の土を動かす経験を積んできたが、女川ならではの難しさがあったという。

「大規模で広範囲の現場を一気に進めていくのに苦心しました」

盛土で難しいのは、切り崩した土を埋めると土の体積が変化すること。そのための細かいノウハウなどは、長く現場で培ってきたからこそ身に付いた財産、と渡邉は語る。「自分が得た経験を、未来に向けて20代の若手職員に引き継ぐのも我々の使命だと感じています。新しいまちづくりは、今後何十年も残っていく仕事。それに携われることにやりがいを感じますし、町の皆さんに頼りにしていただけるのもありがたいですね」

まちへの気持ちが復興の原動力

「新たな芽がいろいろ育つ、土の良い畑のようなまちにしたい」という須田町長。その思いを体現しているのが、女川在住の20～40代の若者だ。震災後の女川を盛り上げた復幸祭の実行委員長を3年間勤めた髙橋敏浩さんに話を聞いた。

「正直、震災直後はまちのことを考える余裕はありませんでした。でも、先輩方に声をかけてもらって復幸祭などにかかわるうちに、まちと一緒に自分も変わっていったんですね。今は、ものすごい大きな横のつながりができて、何かあるとすぐに相談できる。震災前には考えられないことです。大変なこと、辛いことがあったけど、悪いことだけではなかったと捉えられるようになりました」

本年度中には、震災遺構の被災交番を遺した公園の整備が終わる。女川町の復興事業は、いよいよ終盤を迎える。須田町長は8年を振り返る。

「自身の原動力となったのは、あの当時の子どもたちが大人になったときに『女川出身です』と胸を張って言えるように、という思いです。そのためには、私たち大人がちゃんと背中で見せていかなければならない。『瓦礫だらけになった町の中で、女川の大人たちは涙を流しながらも笑顔を作って立ち上がり、前を向いてこのまちを創ってきた。そんな女川という町の出身なんです』と彼らが誇りをもって言ってくれるように」

我がまちを愛する、熱くポジティブな思い。トップランナーとして復興へひた走る力の源は、そこにあるのかもしれない。

アパレルショップ「マルサン」店主でもある髙橋敏浩さん。須田町長と共にバンドを組み、地元のイベントなどでも活躍中。

文・写真 高荷智也（ソナエルワークス代表）

真夏に大規模災害発生
停電時や避難所で欠かせない熱中症対策

防災視点で熱中症対策を考えたことはありますか？　昨年の夏は高温による熱中症被害が全国で問題となり、過去最多となる95,000名以上が救急搬送され、数百名の方が命を落としています。じつは平成以降に発生した大地震は、いずれも涼しい季節か涼しい地域で生じており、私たちは「真夏の大災害」の経験が不足しています。今回は停電時や災害時の熱中症対策を考えます。

真夏の避難生活は熱中症に注意

熱中症は「高い気温と湿度・日差し」と、「激しい運動や水分不足」が組み合わさることで発生します。災害で停電や断水が発生すると、エアコンなどが使えずに室温が上がり、飲食を控えるため水分不足となります。夏場の避難所やライフラインが止まった自宅は、熱中症の危険性が高まります。

たかにともや

「備え・防災は日本のライフスタイル」をテーマに、自身が運営するWebサイト、各種メディアやセミナーを通じて防災を解説するフリーのアドバイザー。
「備える.jp」　http://sonaeru.jp

十分な水と、スポーツ飲料の粉末も準備

熱中症予防にはこまめな水分摂取が不可欠ですが、汗とともに失われた電解質（ナトリウムなど）もあわせて摂取する必要があります。飲料・調理・洗浄などに使う水だけでなく、スポーツ飲料や経口補水液も準備。水で溶くスポーツ飲料の粉末や、「塩あめ」などを追加するのもおすすめです。

気化熱を利用した冷涼グッズも

停電時に体を冷やすには、体を濡らして風を当てる、濡らしたタオルを首から下げるといった、気化熱の利用が有効です。タオルや帽子は熱中症対策以外にも役立つため非常持ち出し袋へ入れ、スペースに余裕があれば速乾タオルや扇子、冷却スプレーや冷却ジェルも準備しておきましょう。

まるごと冷凍弁当のキホン ①

容器ごと冷凍します！

文・写真 MAYA

夫が単身赴任になってから、ごはんとおかずを詰めた容器ごと冷凍する「まるごと冷凍弁当」を作って送っています。まるごと冷凍弁当の一番の魅力は保存がきくことで、作り置きが可能。冷凍なので、離れて暮らす家族に送ることもできます。

食べるときは、容器ごと電子レンジで温めるので、❶耐冷・耐熱で、❷密閉できて、❸ふたをしたまま電子レンジにかけられる容器を選ぶことが基本。ごはんとおかずの容器を分けない「1個弁当」の場合は、ごはんもおかずも一度冷ましてから容器に入れたほうが安心。気温が高くなる夏場、まるごと冷凍弁当は強い味方です。

冷凍弁当のポイント❷
トレーにのせて急速冷凍

おいしさを閉じ込めるには急速冷凍がおすすめ。アルミトレーにのせ、上からもアルミトレーかアルミホイルをかぶせてしっかり冷凍します。

冷凍弁当のポイント❶
おかずとごはんのバランス

均一に解凍するためには、ごはんとおかずがほぼ同量なのが理想。おかずは詰めすぎず、主菜1に副菜2ぐらいがちょうどよいバランスです。ごはんも詰めすぎず、空気を含むようにふんわり入れます。

具だくさんの千草焼き風 卵焼き

●冷凍に向かない卵料理も、具だくさんにしてマヨネーズと片栗粉をほんの少し加えれば冷凍OK。
●卵焼きに入れた五目きんぴらは、アレンジ自在で便利なお惣菜。今回は、しいたけ、ごぼう、にんじん、小松菜、鶏ひき肉入りの豪華版。

だし醤油でおかか和えにした旬のオクラ

●おかか（かつおぶし）を加えると解凍時に水分を吸ってくれます。

1982年生まれ、東京都在住。まるごと冷凍弁当がインスタグラムを中心に反響を呼び、雑誌やWEB、広告などでも活躍中。フォロワーは18万人以上。著書に『まるごと冷凍弁当』（宝島社）、『見た目は地味だがじつにウマい！』（KADOKAWA）などがある。
Instagram　@heavydrinker

＊まるごと冷凍弁当は自家製冷凍食品になるので、電子レンジなどでの温め直しが必須です。　＊冷凍での保存期間の目安は2週間です。

文・写真 黒田健太郎

室内で楽しむ観葉植物の寄せ植え

ベランダで楽しむ寄せ植えを紹介してきましたが、今回は、涼しい室内で楽しむのに最適な観葉植物の寄せ植えを紹介します。室内で鉢植えを楽しむには、最初に鉢を置きたい空間を決め、周囲の家具に合うデザインの植木鉢を選ぶのがコツです。

植物は単体で飾ってもよいですが、葉の形や質感、色味や大きさの違うものを一鉢で楽しめる寄せ植えが、やはりおすすめ。初めから大きな寄せ植えに挑戦するのではなく、手軽にいくつかを植え込んで、テーブルなどに置いて楽しめる小さめの寄せ植えから始めてみましょう。

植物の選び方としては、まずメインになる植物を選び、次に、草丈や葉色などを考慮してメインを引き立てる植物を選びます。さらにもう1種類、葉の色や丈の異なる植物を選ぶとよいでしょう。3種類が互いに邪魔をせず、それぞれが美しさを発揮して引き立て合うように、三角形になるよう配置して植えていきます。仕上げに土の表面にバークチップ（樹皮を砕いたもの）を敷いて、土が見えないように仕上げましょう。

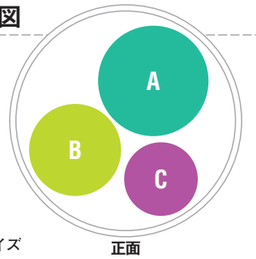
手順

葉の形と色、草丈が異なる3株を三角形になるように配置します

1. 植え込む前に配置を決める。主役になる株の大きいプラスチックファーン（A）を中央から右側後方に配置。引き立て役のシンゴニウム（B）をその左手前、プラスチックファーンの前にニシキシダ（C）を配して三角形になるようにする。

2. 鉢穴をネットでふさぎ、鉢の高さの1/5程度まで鉢底石を入れ、その上に市販の観葉植物用の培養土を入れる。植え込む苗の土の高さが鉢の縁より2～3㎝低くなるように培養土の量を調節する。元肥を培養土に混ぜ込む。
3. ポットから苗を取り出し、根鉢を優しくほぐしながら、配置通りにABCの順に植え込んでいく。
4. 植え込み終了後、表面の土の上にバークチップを敷いて、土が見えないよう仕上げる。

配置図



A プラスチックファーン
B シンゴニウム
C ニシキシダ

鉢のサイズ
直径18㎝、高さ18㎝
材質　陶磁器

濃いグリーンで涼しげな形のプラスチックファーンを主役に、引き立て役に明るいライムグリーンの葉のシンゴニウムを選びました。背が低く赤みがかった葉色のニシキシダを加えてバランスをとっています。

観葉植物の管理

観葉植物のほとんどは熱帯性ですので、暑さに強く寒さに弱い性質があります。一年を通して室内で楽しむことができますが、春・夏・秋の暖かい季節は戸外に置いても楽しむことができます。真夏の直射日光は葉焼けする場合があるので、外に置く場合は半日陰になるところに置きましょう。

くろだけんたろう

埼玉県生まれ。園芸店「フローラ黒田園芸」勤務。自由な発想が生み出す洗練されたスタイルの寄せ植えが熱く支持されている。新刊は『手づくりのスタンドに季節の花を 素敵に飾る小さな庭』（家の光協会）。
フローラ黒田園芸　http://florakurodaengei.com/

UR INFORMATION

UR都市機構からのお知らせ

NEWS

URが災害対策基本法に基づく指定公共機関に指定されました

URは7月1日に内閣総理大臣から災害対策基本法に基づく指定公共機関に指定されました。URは、これまでも大規模災害の発生時には被災自治体に対し被災建築物の応急危険度判定をはじめとした復旧に関する技術支援を行ってきましたが、この指定を機に、自治体支援の体制強化や、関係機関との連携強化により、一層の災害対応支援に取り組みます。

上／指定公共機関への指定にあたっての交付式の様子 。左：山本順三内閣府特命大臣（防災）、右：UR理事長の中島正弘。
左／北海道胆振東部地震で宅地被害の復旧支援にあたるUR職員。

NEWS

「象の鼻パーク」で公園をシェアオフィスにする社会実験を実施しました

青空のもと、公園で仕事をする人々。

横浜港発祥の地である「象の鼻パーク」。この公園で、URは6月11日、「公園をシェアオフィスにする社会実験」を実施し、パーク内にある「象の鼻テラス」で、公共空間の活用や多様な働き方をテーマとしたトークイベントを開催しました。

これは、象の鼻テラス開館10周年記念展「フューチャースケープ・プロジェクト」における、公園がより居心地よく快適な空間になるアイデアの一つとして、UR本社周辺でのエリアマネジメント活動として実施したものです。参加者からは、開放的な空間で気持ちよく仕事ができたとの声がありました。

ＵＲはこの実験を機に、公園の新たな機能や会社員の自由な働き方が生まれることを期待しています。

From Editors

「食」はすべての世代の共通テーマであり、URが考える高齢者や子育て世代など、さまざまな世代をつなげるミクストコミュニティの重要なツールの一つだと考えています。

こども食堂のように孤食を防ごうとする取り組みの一方、巻頭インタビューの栗原さんからは、「一人の食事の楽しみ方」を教えていただきました。

今回の取材を通して感じたこと、それは「食」は自由であること。友人や家族と共有する楽しみ、一人で好きなものを独占する楽しみ。人生において限りある「食」の機会をただ消費するのではなく楽しむことで、人生は随分と豊かになる。そう考えると、毎日が楽しくなりませんか？

（UR都市機構・広報担当OY）

次号のお知らせ

「UR PRESS」59号は
2019年10月末発行予定です。

「UR PRESS」オンライン版もお楽しみください！

「UR PRESS」はパソコンやスマートフォンでもご覧いただけます。紙面にはない巻頭インタビューの動画なども掲載しています。ぜひご覧ください。

UR PRESS で 検索

https://www.ur-net.go.jp/aboutus/publication/web-urpress57/index.html

YouTubeでもさまざまな動画がご覧いただけます

UR都市機構の公式YouTubeでは、UR賃貸住宅、都市再生、ニュータウン、震災復興など、URのさまざまな事業や情報を動画でお伝えしています。『UR PRESS』オンライン版でこれまでに紹介した動画や、テレビCMなどもアップしています。ぜひご視聴ください。

https://www.youtube.com/user/URTOSHIKIKO/

CROSSWORD PUZZLE&PRESENT

プレゼント付きクロスワードパズル

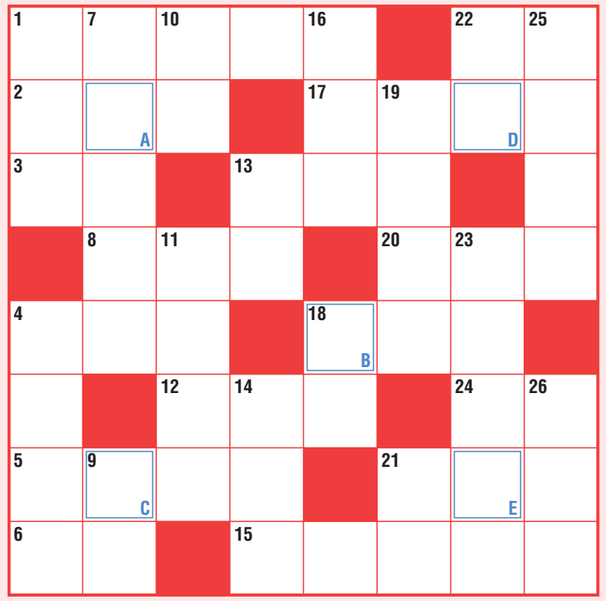
パズル制作 ニコリ

ヨコのカギ

1 配偶者を大切にしている男性
2 浴室の壁や床に使われていることが多い
3 ――・竹・梅
4 あんな高級品、ぼくにはまるで――な存在だ
5 グッドアイデア
6 木の枝みたいな角を生やす
8 ドンドコドンドコ鳴らします
12 太陽系第６惑星
13 はじめのうち。――教育、――発見
15 お祭でもよく見かける、伝統的な照明器具
17 革の色に合わせた――をつけて磨いてください
18 赤や白のあるお酒
20 おみそ汁やボンゴレに使う二枚貝
21 難解で理解しにくい文章だ、――のことを考えていないなあ
22 井戸では――水をくみ上げられます
24 ――シャツは、Ｔシャツとは異なり襟があります

タテのカギ

1 ――隠して尻隠さず
4 とろろ汁は、白飯でなく――にかけて食べるのが好きなんです
7 この祭の由来については、古くからの――が残されています
9 この軟体動物の墨はパスタにも使われます
10 十二支でヒツジとトリの間
11 卓球や新体操は――スポーツです
13 鍋の――が焦げついちゃった
14 ――メートルは、ミリメートルの10倍、メートルの百分の１
16 カッパは――の生き物です
18 アルファベットでＸとＺの間
19 長年の――だから彼の好みは熟知してるよ
21 陰の反対
22 目的地までの経路を――に記しておいたよ
23 ぶらぶら歩いて楽しみます
25 地震――火事親父
26 ――風呂で、心地よい風に吹かれながらのんびり湯に浸かる



A B C D E

57号の解答

A ケ B セ C ン D ヌ E マ F シ

1 ホ	7 ト	10 ト	ギ	16 ス	■	24 カ	26 シ
2 シ F	ヨ	リ	■	17 イ	20 キ	ヌ D	キ
■	8 ア	イ	12 マ E	■	21 サ	ー	ブ
3 イ	ケ	■	13 ツ	18 ヨ	キ	■	ト
リ	■	11 ハ	ゲ	ミ	■	25 ニ	ン
4 タ	9 ラ	イ	■	19 セ B	22 イ	ギ	■
5 マ	ン C	ガ	14 カ	■	23 テ	ワ	27 ケ A
6 ゴ	マ	■	15 ゲ	ン	ザ	イ	チ

プレゼント&応募方法

クロスワードパズルを解いて、プレゼントにご応募ください。

PRESENT 1
From 犬山市
葱茎酒（にんとう） 3名様
創業慶長2年。犬山市の小島醸造がつくる「葱茎酒」は、犬山城主が将軍家に献上した歴史を持つ、尾張最古の酒。家康も好んだといわれる和製ハーブリキュールです。360mℓ入り。

PRESENT 3
From 岩泉町
岩泉松茸酒「森の宝」 2名様
岩泉の地酒、龍泉八重桜に、岩泉特産の松茸を浸け込みました。松茸の豊かな香りが酒に溶け込み、飲むほどに心地よい酔いに包まれます。300mℓ入り。

PRESENT 2
From 女川町
石鹸ポプリ 3名様
地元の素材から手作りした、やさしい香りの石鹸が評判の三陸石鹸工房KURIYA。引き出しやクルマに置いてさわやかな香りが楽しめるシトラス系の石鹸ポプリをプレゼントします。

PRESENT 4
From 岩泉町
龍泉洞珈琲 2名様
世界最高レベルの透明度を誇る龍泉洞地底湖に湧き出す名水「龍泉洞の水」。この水で作った贅沢な缶コーヒー（各190g）を、ブラックとオリジナルブレンド5本ずつのセットで。

●応募方法
本誌付属の応募はがきに、クロスワードパズルの答えと希望プレゼント番号、必要事項をご記入の上、郵送してください。
※応募はがきに記載のQRコードからもご応募いただけます。

●応募締め切り
2019年10月31日㈭（当日消印有効）
当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。

※お酒のご応募は20歳以上の方に限らせていただきます。